

「AKARI：無重力の平行」のここが知りたい！

イサム・ノグチ & 《AKARI》のここが知りたい！

こたえてくれた人！
モエレ沼公園学芸員 宮井和美さん

Q.1 《AKARI》はどうして生まれたの？

イサム・ノグチ（1904-1988）は、《AKARI》を手がける前にも、様々な家具のデザインや光を使った彫刻作品を数多く制作していました。1951年、ノグチが日本に滞在した際に、岐阜県の伝統工芸である岐阜提灯のリデザインを依頼されることとなります。以降ノグチは、岐阜提灯の様々な要素を学び、素材（和紙）の美しさを生かしたシンプルでモダンなデザインを基調とする200種類以上の《AKARI》を生み出しました。これらの《AKARI》は、現在も職人の手によって作り続けられています。

Q.2 モエレ沼公園にはどのような《AKARI》があるの？

モエレ沼公園はイサム・ノグチによって基本設計されました。その関連から、モエレ沼公園には100点ほどの《AKARI》のコレクションがあります。今回の展示では、丸い吊り下げタイプの3種類（Aシリーズ、Dシリーズ、Fシリーズ）の《AKARI》が川上さんの作品とコラボレーションしています。

Q.3 イサム・ノグチは《AKARI》をどのように考えていたの？

ノグチは、《AKARI》のことを「光の彫刻」と表現しています。製品として販売されていることから、一般的な美術作品とは異なり、貧富の差なく、多くの人の手に届くことに価値があるとして、精力的にデザインを生み出してきました。1986年、ヴェネチアビエンナーレ *・アメリカ館の代表作家選ばれた際にも、石の彫刻作品と合わせて多くの《AKARI》を展示したことが記録に残っています。当時も、この《AKARI》シリーズは製品（プロダクト）でもあることから、美術作品として価値を認められるか否かの線引きは難しいものでした。しかし、ノグチはあえてその大舞台で《AKARI》を展示することを選択し、彫刻作品であることを示したのです。

* イタリアのヴェネチアで1895年から2年に1度開催されている現代美術の国際美術展覧会（ヴェネチア・ビエンナーレ財団主催）。
ビエンナーレとはイタリア語で「2年に1度」を指す。

川上りえさん & 《Zero Gravity》のここが知りたい！

こたえてくれた人！
アーティスト 川上りえさん

Q.4 鉄を扱う理由や魅力、こだわりはどんなところ？

学生時代に学んだ先生達の金属作品に影響を受けたこともあり、金属を扱う作品を作るようになりました。その中でも特に加工性が高く、形を自由に表現しやすい鉄は、私の感性に合う素材です。鉄を「叩く」行為や「溶接」加工は楽しいです。また、鉄さびに魅力を感じています。変化が時間を感じさせ、工夫次第で様々な表情を見せてくれるからです。そして、私たちの身体の中にも鉄があることから、鉄が単なる加工素材ではなく、鉄と生命の関係性や、生命の意味における鉄の存在が重要であると思っています。ただ彫刻を作るのではなく、こういった眼差しを、鉄を素材に表現していきたいと考えています。

Q.5 イサム・ノグチの作品について感じることは？

アートの意味や目的には幅がありますが、イサム・ノグチの《AKARI》は、とても身近であることが重要だと感じています。モエレ沼公園もそうですが、外側から見るだけでなく、中に入り込む、中から体験する、自分が周りに取り込まれるという要素に共感を覚えます。

Q.6 普段どんなところで作品を作っているの？

石狩市の八幡町にスタジオを構えています。鉄工所のような場所です。金属加工は大きな音が出るので、都心部は難しく、札幌からあまり離れていないところで、のびのびと作業ができる広い場所を探しました。そういった条件を優先して石狩にスタジオを作りましたが、長年住む中で、この環境の魅力がだんだんわかってきました。雪は結構辛いですけどね！

Q.7 出品作品の《Zero Gravity》は、どのようなイメージで作られたの？

展示されているのは、2013年に東京の国立新美術館で発表した《Zero Gravity》を再構成したものです。重量感のある彫刻作品とは逆に、か細い針金を使ってダイナミックに空間そのものを作品にしたいと考えました。今回はイサム・ノグチの《AKARI》とのコラボレーションが前提ではありますが、入口の動線、特徴ある空間の性質、天井の高さ、見え方などを要素に入れて展示構成を考えました。作品の中をさまよう感じで鑑賞してもらいたいです。

針金は、線の細さが魅力で、それを活かして様々な表現ができます。弾力性があり、はんだ付けなどができる加工のしやすさがある一方で、スケールが大きくなると思い通りにいかない部分もあり結構大変です。か細さの限界にチャレンジしました！

展覧会のここが知りたい！

こたえてくれた人！
アーティスト 川上りえさん

Q.8 今回展示されている《AKARI》は川上さんが選定したそうですが、どのように選んだの？

イサム・ノグチの《AKARI》は、バリエーションが豊富で最初は選ぶのが難しいと感じていました。自分の作品が街や人工的な構造物をイメージさせる直線的で統一感のある作品なので、それと対となる星や宇宙のイメージを持つ丸みのある《AKARI》をセレクトすることにしました。

Q.9 スポットライト（照明）や《AKARI》の光の影響をどこまで計算しているの？

計算は全然出来なかったもので、計8日間の展示作業の中で試行錯誤しながら決めていきました。最初は簡単に決まるかと思っていたのですが、やってみないと見えないところもありました。イサム・ノグチの《AKARI》とスポットライトの加減を考えながら、壁や床に影をどの程度映すか、自分の作品が見えるか見えないかなど、最後の2日間を丸々使って試しました。

Q.10 空間の真ん中にある通路のような部分はどのような意図があるの？

建築物の通路のイメージです。他の要素（柱状の作品部分）を空間にちりばめたので、その中に作品の中心を作りたいと考えました。鑑賞者がそこに入っていこうと思うような入り口、空間が人を招くようなイメージを作りたいからです。

Q.11 冬のモエレ沼公園という場所で展示することの思いとは？

これまでにグループ展として2回ほど展示させてもらいましたが、今回は1人での展示だったので大変光栄でした。モエレ沼公園は、建設されることを知った時から興味があり憧れでした。展示空間は屋内なので、周りの環境と直接関係ありませんが、個人的に冬のモエレ沼公園を堪能できたことで、展示に向けたモチベーションが保てたと感じています。スタッフの皆さんのサポートも大変素晴らしかったですし、良い関係で仕事ができることはとても重要で、楽しく仕事ことができました。

このリーフレットは、^{サイアフ}「SIAF ふむふむシリーズ」の一環として、札幌国際芸術祭（略称：SIAF）と一緒に盛り上げていく市民メンバー **SIAF 部員**が、アーティストの川上りえさんとモエレ沼公園学芸員の宮井和美さんにインタビューし作成しました。

「SIAF ふむふむシリーズ」では、他にも川上りえさんのインタビュー動画などのプログラムを公開しています。詳しくはSIAF公式ウェブサイト（siaf.jp）をご覧ください。

本展覧会を撮影したあなたのとおきの一枚を以下のハッシュタグで SNS に投稿し、あなたの感じた展覧会の魅力を共有してください！

#モエレでふむふむ #AKARI 無重力の平行レ

SIAF ウェブサイト
QR コード



編集・発行：札幌国際芸術祭実行委員会 / 札幌市
協力：川上りえ、公益財団法人札幌市公園緑化協会
問い合わせ：札幌国際芸術祭実行委員会事務局
〒060-0001 札幌市中央区北1条西2丁目札幌時計台ビル10階
TEL: 011-211-2314 E-mail: info@siaf.jp
<https://siaf.jp>



助成：令和3年度文化資源活用推進事業

モエレでふむふむ！

SIAF
ふむふむ
ふむふむ
シリーズ × SIAF部